

野口幽香と二葉幼稚園 (1)

— 先行研究の検討 —

松 本 園 子

(2006年10月31日受理)

要 約

貧困層を対象とし、1900（明治33）年に東京で創設された二葉幼稚園（後、保育園）は、保護と教育の統一という理念をもった保育施設の先駆として著名である。本研究は二葉幼稚園の創設者の一人である野口幽香の人と思想を検討し、近代日本保育史における二葉幼稚園創設の意味を問うことを目的とするが、本稿ではその第一段階として、史資料と先行研究の概要を示し検討した。先行研究のうち特に、広く読まれ、しかし誤りや問題点が多い、上笙一郎、山崎朋子著『ひかりほのかなれども——二葉保育園と徳永恕』について、やや詳しく検討した。特に二葉幼稚園史の事実関係上の問題について、創立者の一人森島峰を戸籍上の〈美根〉で表記していることへの疑問、二葉幼稚園設立主意書の執筆者について、さしたる根拠もなく代筆説をとっていることへの疑問、二葉幼稚園の園名の由来、園歌の制定時期について誤った解釈をしていること、を指摘した。

キーワード 明治期、保育、野口幽香、二葉幼稚園、上・山崎『ひかりほのかなれども』

はじめに

1900（明治33）年、東京麴町に開設された二葉幼稚園（後に、二葉保育園と改称）は、貧困層の幼児を対象とした幼稚園であり、保護と教育の統一という理念をもった保育施設の先駆として著名である。保育史の通史的著作には必ず取り上げられ、この施設自体を取り上げた研究も見られる。

本研究は、二葉幼稚園の創設者の一人である野口幽香の人と思想を時代背景とのかかわりで検討し、近代日本保育史における二葉幼稚園創設の意味を改めて問うことを目的としている。

本稿はその第一報として、二葉幼稚園に関する先行研究について検討し、それを通じて筆者の視点と方法の明確化を図ることを課題とする。Ⅰで関係史資料を、Ⅱで先行研究を概観し、Ⅲで先行研究のうち特に、上・山崎『ひかりほのかなれども』をと

りあげ、批判的検討を行う。

Ⅰ 史資料

まず、野口幽香と二葉幼稚園に関する史資料について、筆者がこれまでに把握している主なものは以下のとおりである。

(1) 二葉幼稚園／保育園発行・保存文書（戦前期）

二葉幼稚園・保育園史研究の基本史料であり、①～⑥は復刻出版されている（児童問題史研究会監修『日本児童問題文献選集14／私立二葉幼稚園報告書』日本図書センター、1984）。同じものが『二葉保育園八十五年史』（1985）にも収録されている。

①私立二葉幼稚園設立主意書（1900.2）

②私立二葉幼稚園拡張主意書（1913.9）

③二葉保育園改築落成報告書（1929.5）

④年次報告

私立二葉幼稚園第一回報告／明治33年1月～6月

私立二葉幼稚園第二回報告／明治33年7月～34年6月

私立二葉幼稚園第三回報告／明治34年7月～35年6月

私立二葉幼稚園第四回報告／明治35年7月～36年6月

私立二葉幼稚園第五回報告／明治36年7月～37年6月

私立二葉幼稚園第六回報告／明治37年7月～38年6月

私立二葉幼稚園第七回報告／明治38年7月～39年6月

私立二葉幼稚園第八回報告／明治39年7月～40年6月

私立二葉幼稚園第九回報告／明治40年7月～41年6月

私立二葉幼稚園第十回報告／明治41年7月～42年6月

私立二葉幼稚園第十一回報告／明治42年7月～43年6月

私立二葉幼稚園第十二回報告／明治43年7月～44年6月

私立二葉幼稚園第十三回報告／明治44年7月～45年6月

私立二葉幼稚園第十四回報告／明治45年7月～大正2年6月

私立二葉幼稚園第十五回報告／大正2年7月～3年6月

私立二葉幼稚園第十六回報告／大正3年7月～4年6月

私立二葉保育園第十七回報告／大正4年7月～5年6月

私立二葉保育園第十八回報告／大正5年7月～6年6月

私立二葉保育園第十九回報告／大正6年7月～7年6月

二葉保育園第二十年報／大正7年7月～8年12月

二葉保育園第二十一回報告／大正9年1月～12月

二葉保育園第二十二回報告／大正10年1月～12月

二葉保育園第二十三年報／大正11年1月～12月

二葉保育園第二十五年報 (1925.12)

⑤二葉保育園 (1928.5)

⑥二葉保育園 (1934.1)

⑦二葉幼稚園園誌 (明治33年1月10日～39年9月、墨書、筆者コピー所蔵)

⑧The Object of Hutaba Yochien (英文主意書、筆者コピー所蔵)

(2) 野口幽香関係文書

東京女子大学比較文化研究所に「野口文書」として、野口の書簡などが保存されている (同研究所『野口文書分類仮目録』1969、参照)。

本研究に必見と思われるが、残念ながら本稿準備中の現在、マイクロフィルム化作業中で閲覧がかなわず未見である。他日を期したい。

(3) 行政文書等における紹介、言及 (戦前)

内務省、東京府、東京市による社会事業関係行政文書等に二葉幼稚園・保育園についての言及が見られる。そのうち、沿革や現状などについてある程度まとまった記述のあるものは以下の通りである。これらの内容はいずれも上記の年報など二葉幼稚園・保育園発行文書に依拠したものであり新味はないが、二葉幼稚園・保育園が、内務省の感化救済事業、社会事業の政策のなかで、どのように位置付けられたかについて知ることができる。カッコ内に該当箇所 (ページ) を示した。

①内務省地方局『地方資料・特殊救済事業及職工掖済事業』1907 (p.8-10) —— 社会福祉調査研究会『戦前期社会事業史料集成』第1巻、日本図書センター、1985、に収録 (以下『史料集成』と略記)

②内務省地方局『我国に於ける慈恵救済事業』1908 (p.11-13) —— 『史料集成』第1巻

③内務省『感化救済小鑑』1910 (p.46-47) —— 『史料集成』第1巻

④内務省『第三回奨励及助成感化救済事業一斑』1911 (p.15-17) —— 『史料集成』第1巻

⑤東京府『東京府慈恵救済小鑑』1911 (p.59-61)

⑥中央慈善協会『日本社会事業名鑑』1920 (第式輯p.77-78) —— 『史料集成』第9巻

⑦東京市社会局『東京社会事業名鑑』1920 (p.100-102)

⑧内務省社会局『本邦社会事業概要』1922 (p.101) —— 『史料集成』第2巻

⑨内務省社会局社会部『本邦社会事業概要』1926 (p.187) —— 『史料集成』第2巻

⑩内務省社会局社会部『本邦社会事業概況』1928 (p.182) —— 『史料集成』第2巻

⑪東京府学務部社会課『東京府管内隣保事業並保育事業施設史概要』1935 (p.17-19、63-64)

(4) 雑誌、新聞記事等

当時の雑誌、新聞に掲載された以下の二葉幼稚園紹介記事がある。史料として位置付け、今後さらにこの種の記事の探索をすすめる。

巖谷小波「二葉幼稚園 (参観記)」『少年世界』6巻4号、1900, p.9-16

生田葵山「幼児の祝会」『少年世界』9巻4号、1903, p.91-97

岡田緑園「最近中央教育界 <22> 鮫ヶ橋の幼児預所 (上)」「同 (下)」『大阪毎日新聞』明治39年12月2日、4日、1906

また、戦前期に野口幽香本人への聞き取りに基づいてまとめられた以下の野口伝も、史料として扱う。

野口幽香 (神崎清筆記)「貧しき子等に生涯を捧げて」『婦人公論』昭和14年6月号、1939, p.62-82

神崎清『現代婦人伝』中央公論社、1940 (p.33-71「野口幽香」)

神崎 (1940) は、『婦人公論』昭和13年4月号からの連載「私の歩んで来た道」を単行本として出版したもので、本書で取り上げられているのは、野口のほか、林歌子、三宅花圃、吉岡弥生、大江スミ、徳富愛子、上村松園、長谷川時雨、一宮操子、木内キヤウ、柳原燦子、守屋東、である。いずれも本人の談話を筆記し、その他の資料や文献を溶かし込み原稿化し、本人が目を通したものを雑誌に発表し、出版にあたり再度本人の校閲を経たという (あとがき)。野口伝についても十分な調査に基づいて丁寧にまとめられたことが窺われ、生い立ちや二葉幼稚園設立の動機、その後の経過など内容豊富でかなり信頼度の高いものと思われる。「野口幽香」の初出は、昭和14年6月号の「貧しい子等に生涯を捧げて」である。ここでは野口の名で発表されているが、末尾に (神崎清筆記) とある。単行本の内容と比べると、単行本ではカットされている部分もあるが、殆ど違いがないといってよい。

II 先行研究概観

これまでに筆者が把握している、野口幽香と二葉幼稚園に関する研究、あるいはある程度まとまった言及をしている先行研究は以下のとおりである。一部で触れているものについてはカッコ内に該当箇所を示した。

朝原梅一『幼稚園託児所保育の実際』三友社、1940 (p.71-73)

古木弘造『幼児保育史』巖松堂書店、1949 (p.112)

一番ヶ瀬康子、泉順、小川信子、穴戸健夫『日本の保育』ドメス出版、1962 (p.24-38, 42-45)

上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社、1965 (p.51-68「ともしびを貧しき子らに」)

日本保育学会『日本幼児保育史』第二巻、フレーベル館、1968 (p.213-224、穴戸

- 健夫「二葉幼稚園の設立とその意義」
高見沢潤子『二〇人の婦人たち』教文館、1969 (p.95-112「野口幽香」)
貝出寿美子「野口幽香の生涯」『東京女子大学比較文化研究所紀要』27巻、1969、
p.55-117
貝出寿美子「野口幽香の生涯 (続)」『東京女子大学比較文化研究所紀要』28巻、
1970、p.1-26
吉田久一、一番ヶ瀬康子、小倉襄二、柴田善守『人物でつづる近代社会事業の歩み』
全国社会福祉協議会、1971 (p.76-85、一番ヶ瀬康子「野口幽香——信仰的实践
と保育事業」)
勅使千鶴「野口幽香」五味百合子編『社会事業に生きた女性たち』ドメス出版、
1973
松本園子「二葉幼稚園覚書——貧民幼稚園の实践とその周辺」『精神薄弱問題史研
究紀要』15号、1974、p.57-82
貝出寿美子『野口幽香の生涯』キリスト教新聞社、1974
上笙一郎・山崎朋子『ひかりほのかなれども——二葉保育園と徳永恕』朝日新聞社、
1980
竹西寛子「野口幽香」円地文子監修『近代日本の女性史第9巻／学問・教育の道を
ひらく』集英社、1981
村岡末広「解説」児童問題史研究会監修『日本児童問題文献選集14／私立二葉幼稚
園報告書』日本図書センター、1984
二葉保育園『二葉保育園八十五年史』二葉保育園、1985
松川由紀子「19世紀末カリフォルニアの無償幼稚園運動とわが国への影響——森島
峰とカリフォルニア幼稚園練習学校を中心に——」『山口女子大学研究報告』13
号、1987、p.27-37
宍戸健夫「明治後期における二葉幼稚園の研究 (1)」『愛知県立大学児童教育学科
論集』23号、1990、p.41-49
宍戸健夫「明治後期における二葉幼稚園の研究 (2)」『愛知県立大学児童教育学科
論集』24号、1991、p.40-60
宍戸健夫『保育の森——子育ての歴史を訪ねて』あゆみ出版、1994 (p.56-64「愛
と希望と信仰と——二葉幼稚園から二葉保育園へ」)
清水教恵「二葉保育園とその社会事業活動」『龍谷大学論集』451号、1998、p.82-
103
松本園子「野口幽香——都市下層社会と保育事業」室田保夫編『人物で読む近代日
本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房、2006

朝原 (1940) は、保育関係の行政・経営の第一線にいた著者による保育事業全般の概説書である。そのうち「第4章本邦に於ける託児所の起源」において、赤澤鍾美に

よる新潟の幼稚園保護会とともに二葉保育園について取り上げている。本書の復刻版解説で、宍戸健夫が「特に託児所の歴史は、貴重な資料を発掘し、その後の幼児保育史研究に大きな影響を与えた」^{注1)}としているように、概説書であるが戦後の保育史研究の指針ともなった書である。ただし、二葉保育園についての記述は、すでに明らかにされていた園の発行物や内務省などの文書の域を超える内容はない。

古木 (1949) は、戦後いち早く出版されたもので、教育学者による保育史である。幼稚園が中心であるが、二葉幼稚園／保育園については「5、託児所及び季節保育所」の中で、朝原前掲書に依拠した紹介をしている。

一番ヶ瀬他 (1962) は、教育史、社会福祉、建築学研究者の共著による保育通史である。二葉幼稚園／保育園については、それまでの文献における沿革と現状の紹介というレベルを超えて、設立とその後の経過、その社会的背景、内務省の政策との関係、保育内容や保育条件と様々な角度から取り上げ、保育史におけるこの施設の意味を示唆した。

本書の共著者のひとり、宍戸健夫はその後も二葉幼稚園／保育園について研究をすすめている。日本保育学会『日本幼児保育史』(1968) においては二葉幼稚園設立の意義について考察し、また野口と並ぶもう一人の創設者森島峰について言及し、米国で学んだその経歴を紹介している。

宍戸はさらに1990、1991年の論文で保育実践史的側面に焦点をあてた研究を明らかにした。ここでは、二葉幼稚園が、1882年の文部省示諭に定められた幼稚園普及の政策、森島が体験したアメリカの無償幼稚園運動、キリスト教徒を中心としたヒューマニスティックな慈善事業、という三つの潮流が合流して誕生したこと、貧困のため幼稚園保育を受けられぬ幼児を保育し、それにより父母の労働を助けるという二つの目的を持ったこと、それを達成するために保育料無料、終日保育、三歳未満児保育という三つの条件を創り出したことを指摘している。そのような目的と条件のもとで行われた保育実践は、心地よい環境を与え、保健衛生面や生活習慣への働きかけ、子どもの本性たる活動を真から満足するようにしてやり、キリスト教の信仰の上になつた保育活動であり、親とのかかわりを重視するという特徴をもち、それまでの恩物中心の幼稚園にはみられなかった新しい保育実践の創造が認められるという。

児童文学者の上・婦人問題研究者の山崎の共著 (1965) は、明治以来昭和30年代までの代表的幼児教育施設や人物の個々の歴史を語りながら、全体で近代日本の幼児教育の輪郭をつかめるようにした (まえがき) という本である。精力的な取材と巧みな文章表現により、面白く読め、考えさせられること多い一種の保育通史である。この中で「東京・二葉保育園」が取り上げられ、開設以来の歴史とともに特に野口らの後継者徳永恕の人と仕事に紙数が割かれている。

上・山崎はその後も二葉幼稚園／保育園、特に徳永について関心を持ち続け、1980年にこのテーマに絞った本を出版した。新史料を発掘し、関係者からの聞き取りを行い、前書と同様巧みな表現でまとめられ、広く読まれている。二葉幼稚園／保育園に

関して本書出版後書かれたものには、必ず参考文献として挙げられている。しかし、筆者は本書には二葉幼稚園史研究の上で、看過できないいくつかの問題点があると考え、それらについてⅢで検討を行う。

貝出 (1969、1970) (1974) は東京女子大学比較文化研究所において野口文書の整理を担当した歴史学研究者による野口伝である。野口文書を駆使し、生い立ちや思想遍歴を詳細に描き出したもので1969、1970年の論文に加筆修正し1974年の単行本の出版となった。二葉幼稚園に直接触れた部分はさほど多くはないが、全体から野口が保育を志した背景とその保育観を窺うことができ興味深い。^{注2)}

村岡 (1984) は、二葉幼稚園年報復刻版の解説であり、年報についての社会事業史の視点からの評価、書き手についての推論等が述べられており参考になる。

二葉保育園 (1985) (以下では『85年史』と略記) は二葉幼稚園創設以来85年の歴史をまとめたものであるが、大部な85年史の大半は年報等を復刻収録した資料編であり、年史部分は比較的簡単にまとめられている。構成は、第一章慈善教育時代、第二章社会事業時代、第三章社会福祉事業時代、第四章現代の各施設のあゆみ、である。戦前部分である第一章は大友昌子、二章は川西康裕が執筆担当し、二葉幼稚園／保育園の創立とその後の展開をもたらした社会的背景の叙述に力が入れている。

松川 (1987) は、森島峰を通じて二葉幼稚園草創期に、アメリカ・カリフォルニアの無償幼稚園運動の影響があったという仮説のもとに、森島が学んだカリフォルニア幼稚園練習学校の教育内容や実習した無償幼稚園の状況を明らかにし、初期の二葉幼稚園にみられるカリフォルニア色について検討している。二葉幼稚園史に新しい光を当てたものであり、前掲の宍戸 (1990、1991) には、本研究の成果が取り入れられている。

清水 (1998) は、大正中期から後半にかけての我が国社会事業形成期における二葉保育園の社会事業活動について概観したものであり、主として上・山崎 (1980)、二葉保育園 (1985) に依拠して執筆されている。

最後に、筆者自身のものとして、松本 (1974) は二葉幼稚園年報などを使ってまとめた卒業論文^{注3)}をベースにしたものである。もとより未熟ではあるが、今日的 (1970年当時) な保育問題の方向性を見出すことを念頭に、二葉幼稚園の保育条件、保育内容の新しさ、必要に応じて条件を創り出そうとする柔軟な運営姿勢に注目して考察したものである。

松本 (2006) は短い野口伝である。本小伝執筆の中で、筆者に新たな問題意識が生まれ、野口と二葉幼稚園についてより詳細な研究に取り組む動機を与えてくれた。

Ⅲ 上・山崎『光ほのかなれども』の問題点

上笙一郎・山崎朋子共著の『光ほのかなれども——二葉保育園と徳永恕』(朝日新聞社刊) は1980年に発行され、その後文庫化もされ (1986年光文社文庫、1995年社会

思想社現代教養文庫)、広く読まれてきた。

本書の性格はノンフィクション文学である。史料を発掘し、聞き取りを行い、これらに依拠した叙述をしているが、資料上の裏づけのある事実と、著者の想像力の産物との区別が不分明である。随所に著者の独自見解が述べられているが、その根拠は必ずしも示されていない。したがって、本書を研究に利用する場合は、著者の想像力によって書かれた部分のあることを認識した上での扱いが必要である。

にもかかわらず、本書はその後の論文等で無批判に参考にされ、引用されてきており、二葉幼稚園／保育園に関する研究上の必読文献であるかの観がある。実は筆者自身も2006年の野口小伝において、問題を感じ、躊躇しつつ「引用・参考文献」のひとつとして本書を挙げざるをえなかった^{註4)}。

四半世紀前に出版された本書を、今改めて批判的検討の対象とするのは、本書が広く受け入れられているだけに、二葉幼稚園史に関する誤謬がこのまま定着し広がっていくことを恐れるからである。

基本的な視点、方法上の問題などより根本的な検討は、今後、筆者自身の研究を進めるなかで行なう。ここでは、二葉幼稚園の歴史に関する事実認識に限り、特に重要と思われる点を取りあげ、問題点を指摘しておきたい。

(1) 創立者森島(斉藤)峰の名前の表記

まず、野口幽香と並ぶもう一人の創立者森島峰(結婚後、斉藤に改姓)の名前の表記の問題である。

本書は森島(斉藤)の次男からの聞き取りにより、従来殆ど知られていなかった峰の生い立ちや人となりについて、興味深い情報を伝えている。これらについては、今後の検証が必要であるが、その中で名前の表記についてのみ述べておきたい。

峰の次男斉藤方郎氏が本書の著者に次のように語ったという。

母の名は〈美根〉と書くのが正しいのですよ。世間では母の名を〈峯〉〈峰〉〈みね〉〈ミネ〉とさまざまに表記しているようですが、そら、御覧ください、ここにある森島家の戸籍簿には〈美根〉と萬葉仮名式に記載してありますでしょう。…
(p.48)

8

この聞き取りにより峰の戸籍上の表記が〈美根〉であることを知った上・山崎は、本書において森島(斉藤)の名前を、すべて「美根」で表記している。

しかし、これは大変おかしなことである。戸籍上の姓名およびその表記が、実生活上の通称や表記と異なることは珍しいことではない。歴史的叙述において人名は本人の名乗りおよび実際に通用していたものを尊重すべきであり、必要に応じて戸籍名は〇〇、幼名は××等と記せばよい。

森島(斉藤)峰の場合は、二葉幼稚園年報などには一貫して「峰」が使われている

(一部に「峯」が使用されているが、「峯」は「峰」の異体字)。二葉幼稚園設立の際、東京府に提出した履歴書^{注5)}も「峰」となっている。設立主意書の署名が「森島みね」となっているのを除き二葉での活動は「峰」で通している。これは、「峰」という表記が、第三者による誤りが流布したという類のものではなく、本人が自らの意思で使用し、世間にも通用していたことを示している。文献上「美根」という表記がみられるのは『女子学習院五十年史』^{注6)}中の旧職員名簿に「斉藤美根」とあるものだが、学習院においては、官立学校の常で戸籍の表記どおりとすることが要求されたのであろう。ここでは野口の名前も、戸籍表記の「野口ゆか」である。

上・山崎が何らかの理由で戸籍表記主義を採るのであれば、それは他の人物についても適用されなければおかしい。例えば、野口幽香の戸籍上の表記が「ゆか」であることは以前から知られている^{注7)}。そして、上・山崎も野口の名前が戸籍上「ゆか」であることを承知している (p.38) が、こちらについて本書は「ゆか」ではなく「幽香」という表記を採用しており、一貫性に欠ける。

問題は、これが上・山崎の著書にとどまらず、“〈美根〉と書くのが正しい、〈峰〉は間違い” という理解が、あたかも常識であるかのように通用していることである。

例えば『二葉保育園85年史』という園のいわば正史において、「美根」が使われていることは大きな問題である。同書資料編に収録されている二葉幼稚園／保育園年報等の公式文書における表記が「峰」であるのに、それとは異なる「美根」を使うのであれば、その理由が明記されなければならない。しかし、それについて何の説明もない。

また、宍戸 (1990、1991) においても「美根」が使われている。氏はこの論文以前の著作では「峰」と表記しているが、それを変更したことについて、何の説明もなされていない。

(2) 設立主意書の執筆者

1900年の二葉幼稚園開設の際「私立二葉幼稚園設立主意書」が作られ、各方面に配布された。『85年史』他様々な文献に掲載されており、「幼稚園の必要はこと新しく述ぶるまでもなきことにして…」とはじまる明快で心をうつ名文である。主意書の署名は「森島みね、野口ゆか」の連名である。

この主意書について、上・山崎は「三十代に足ふみいれたばかりの女性の文章としてはいかにも硬質だから、ふたりの意思を体して誰か男性が執筆したものであろう」(p.69) と、森島、野口が執筆したものではないことをほぼ断定している。それに続けて「資金集めの音楽会の発起人のひとりに留岡幸助がおり」「その留岡の思想に基本的な点が一致しており、その文体にも類似点がなくもない」ので、「幽香と美根に乞われて彼が筆を執ったものであるかもしれない」と、執筆者が留岡幸助ではないかという推測を示し、別の箇所「留岡幸助の筆になるのではないかと思われるその趣意書」(p.71) と、さらに留岡代筆説を断定的に述べている。

主意書留岡代筆説は根拠がないし、なぜそのような説をここで持ち出す必要があるのか真意を測りかねるが、以下順に検討してみよう。

まず「女性の文章としてはいかにも硬質」であることから、野口、森島の文章ではないという推測についてはどうであろう。

森島については不明であるが、野口は生涯の間に多くの文章を物している。特に、五歳のときから漢学を学んだ彼女は、若い時から漢文調の、硬質ではあるがなかなかの名文と思われる文章をいくつか遺している^{註8)}。したがって、野口がこの主意書を執筆したとしても何の不思議もない。

次に「ふたりの意思を体して誰か男性が執筆」「幽香と美根に乞われて彼が筆を執った」という点であるが、余人はいざしらず、年報を発刊し、多くの文章を表す能力のあった彼女たちが、設立主意書に限って人に頼む必要があったらどうか。そのような必要はなかったはずである。

「留岡の思想に基本的な点が一致」という点は、救貧よりも防貧という思想に野口らが共感して事業をすすめたという点ではそうであったろう。しかし「文体にも類似点がなくもない」とは何を根拠としているのであろう。留岡のどの文書と比較したのであろう。筆者は、試みに留岡がほぼ同じころ(明治32年11月)に執筆した「家庭学校設立趣旨書」^{註9)}と「二葉幼稚園設立主意書」を見比べてみた。同時代の、文語体の、施設の設立主意書という同種の文書であるから、類似点はある。しかし、比較してみると二つの文章は異なる雰囲気を持ち、二葉の主意書は少なくとも留岡が書いたものではない、と筆者は判断した。

「私立二葉幼稚園設立主意書」は、やはり野口と森島が二人で相談し、執筆したものと考えるのが自然である。『85年史』には、原稿用紙に書かれた設立主意書と、二葉幼稚園規則草稿の写真が掲載されている^{註10)}。ここからも二人が主意書と規則を準備した姿が伝わってくる。

上・山崎は主意書留岡代筆説を主張するのであれば、代筆を依頼した野口、森島側の必要性と、留岡の代筆であるという客観的証拠を提示すべきである。とはいえ、主意書代筆説は、本書全体の流れにはかかわりのない事柄である。それを取り立てて、さしたる証拠もなく述べているのはなぜだろうか。結局、これはストーリーに変化をもたせる彩として加えられたものであり、また、そこには女性は男性に依存するものである、という伝統的女性観にとらわれている著者の思考が見出されるのである。

10

(3) 園名の由来と園歌の制定時期

上・山崎は、二葉幼稚園の園名の由来と、園歌の制定の時期について、野口および徳永が述べていることは、彼女らの記憶違いによる誤りだとして、その点についての新説を述べている。しかし、それこそ史料の読み誤りと恣意的解釈による誤りであることを指摘したい。

まず、園名の由来について野口幽香は「二葉といふ名は、細川校長作の幼稚園保母

合唱歌の中『二葉の撫子さかゆく園生』といふ句から選んだものです^{注11)}と述べている。上らはこの園名の由来についての野口の説明は誤りであるという。

その理由は、細川の「保姆合唱歌」は二葉幼稚園創立より後の「明治42年の春頃に作られ」たもので「おそらく幽香は、創立の際に〈やがて伸びて亭々と茂れよ〉と念じてつけた〈二葉〉の名を、のちに細川の『幼稚園保姆合唱歌』の詩句のうちに見出して喜んだ記憶と、老いの至るにつれて時間的に混同してしまったに違いない」(p.148) というのである。

法制学者細川潤次郎が女子高等師範学校校長を勤めたのは1891(明治24)年8月から94年3月までであり、この間1893年より華族女学校校長を兼務した^{注12)}。野口が女高師を卒業して附属幼稚園に勤務したのが1890年であり、その後1894年に細川校長が兼務する華族女学校幼稚園に転勤した。したがって、野口と細川の関係は深い。

細川が「幼稚園保姆合唱歌」を作詞したのは女高師校長在職中であると考えられ^{注13)}、二葉幼稚園開園の1900年頃当然この歌は存在していた。野口が親しく、尊敬もしていたであろう細川の歌のなかから「二葉」という園名を選んだのは自然なことであり、園名についての野口の説明は納得できる。

では、上・山崎はなぜこれが間違いだということか。彼らは幼稚園保姆合唱歌が明治42年頃作られたと断じている。それはこの歌が『婦人とこども』誌の明治42年4月号に「発表されたもの」(p.147)だからであるとする。

『婦人と子ども』(『幼児の教育』の前身)の明治42年4月号の巻頭には確かに「保姆合唱の歌」が掲載されている。しかし、それはこの歌がここで初めて「発表された」ことは意味しない。新年度開始に当たり、幼稚園保姆に長年親しまれたこの歌を掲げたということであろう。明治42年といえば、細川はすでに女高師校長職を離れて久しく、年齢も75歳になっていた。

次に「たかき其の神に」で始まる二葉幼稚園園歌について、「従来、二葉幼稚園の創立とともに作られたものと信じて誰も疑わなかった」(p.147)が、これは誤りで「大正三年——すなわち創立まさに十五年目に、その存在のシンボルともなすべき『二葉幼稚園園歌』を制定したのである」(p.145-146)としている。

しかし、これも上・山崎の誤りで、園歌は創立後早い時期に作られたものである。明治33年1月10日の創立の日から断続的につけられている「園誌」を見ると、明治34年12月26日はクリスマス会を行ったとして、次のように記録されている。

十二月二十六日 楽しきけふのクリスマス

昨年ノ如ク美シク飾ラレタル園デクリスマスヲスルノデ児一同大ヨロコビデア
今年ハモークリスマスニ付イテヨク知ッテ居ル昨年ノ通りニ席ニ付イテ左ノ順序デ
初マル

一 唱歌 高き其神に	一同
二 賛美歌 思へば昔イエス君	一ノ組六名

- 三 話
- 四 賛美歌
- 五 贈物分配

牧師綱島氏
一同

「唱歌 高き其神に」とあるのが園歌であろう。園歌は少なくとも明治34年12月には存在したことになる。明治37年1月8日の日誌には「始業日ニ付、君ガ代園歌等ヲ歌ヒ菓子ヲ与ヘテ返セリ」とある。第12回報告（明治43年7月～44年6月）中の「保姆の日記」にも「園歌」を歌ったことが記されている（『85年史』、p.313）。節目の行事の時にこの歌が歌われていたことが伺える。

上・山崎が園歌の制定を大正3年と断言している根拠は示されていないが、どうやら『私立二葉幼稚園第十五年度报告』（大正2年7月～3年6月）に、園歌の全文が初めて掲載されていることかららしい。しかし、この年報中にこの年、園歌が新たに制定されたという何らの説明もない。以前から存在したが、年報には掲載されたことのない園歌を、15年という節目の年の年報に改めて掲載した、ということであろう。

上・山崎は細川作の「幼稚園保姆合唱歌」についても、二葉幼稚園「園歌」についても、それが雑誌なり年報なりに掲載された時をもって、作成、制定されたと判断し、そこから様々な想像を膨らませて誤った判断を広げている。それにより、野口を「老いの至るにつれて時間的に混同してしまった」（p.148）ボケ老人に、徳永を「恕はといえば、その幽香から教えられたとおりのこと」(同)のことを疑わぬ、主体的判断のできない人物に仕立て上げている。

おわりに

筆者はここ数年、昭和戦中期の保育とその時代について研究してきた。転換期にある現在、今後の方向を見出すためにも、今日にいたる戦後という時代を産み出した戦中期について理解したかったからである。その中で、戦中期を理解するためには、結局近代日本のスタートから明らかにしなければならない、そのために明治期保育の研究が必要であると考えようになった。

そうしたときに、野口幽香伝執筆の機会があった。執筆のために野口幽香と二葉幼稚園について改めて調べる中で、これをさらに深く研究することにより、明治という時代と、この時代を出発点とする日本の保育の全体像が見えてくるのではないかと考えたのである。

幽香は、維新—明治の激動期に生まれ育ち、我がこととして日本の将来を考えた知識人のひとりであった、と筆者は考える。その幽香が、幼児教育（保育）にどのような思いを抱いて幼稚園保姆となり、また貧児のための幼稚園を開いたのか、に関心がある。

先行研究では概ね、幽香が華族女学校というエリート層の幼稚園保姆であったこと

を所与の事実として、そこから貧しい子どもたちの保育に取り組んだ理由を解釈し、評価する、というストーリーが描かれている。しかし、筆者はそもそも幽香が幼児教育をめざし、幼稚園保姆になったことの中にこそ、貧しい子どもの保育に取り組んだ動機が存在すると考える。

このことを、今後の研究の中で明らかにしていきたい。

注

- 1) 宍戸健夫『『幼稚園託児所保育の実際』解説』『大正昭和保育文献集』別巻, 日本らいぶらり, 1978.
- 2) 1950年の野口没後、その書簡、日記などは、幽香庵に保存されていたが、これらが1967年に徳永らによって東京女子大に寄贈され「野口文書」となった。野口がクリスチャンであったことと、東京女子大学長を務めた無二の親友安井哲との関係であったという(貝出「野口文書について」『野口文書分類仮目録』)。
- 3) 松本園子「日本保育史への一研究 : 二葉保育園を例として」1970年度お茶の水女子大学卒業論文
- 4) 原稿段階では、参考文献としてあげた上で、「本書は読み物としては面白いかもしれないが、誤りや恣意的解釈が多く、参考にする場合注意が必要」なるコメントを付した。しかし、全体の統一性のために削除され、筆者もそれを了承した。
- 5) 東京都『都史紀要14/東京の幼稚園』1966, p.164-165. 上・山崎(1980) p.52-53.
- 6) 女子学習院『女子学習院五十年史』1935. 斎藤はp.52、野口はp.41、53に記載。
- 7) 例えば貝出(1974) p.7.
- 8) 例えば、父についての手記「先君物語」(貝出1974、p.7-9)、友人尾藤初子米国留学にあつたの送辞(同、p.25-26)
- 9) 同志社大学人文科学研究所『留岡幸助著作集』第1巻, 同朋社, 1978, p.531-532.
- 10) 二葉保育園(1985) p.14-16. なお、創立主意書の草稿写真が本文中に掲載されているが、創立主意書について文中ではいっさい言及がないのは不思議である。85年史の執筆者が、上・山崎の主意書代筆説に動揺して言及を避け、草稿写真のみを掲載し、読者の判断に委ねたということであろうか?
- 11) 神崎(1940) p.60.
- 12) 戦前期官僚制研究会『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会, 1981, p.206.
- 13) 残念ながら、細川の「幼稚園保姆合唱歌」制作時期を特定する資料を見出していない。今後、特定のための調査を進めたい。野口文書分類仮目録には「幼稚園保姆合唱の歌」があり、これを閲覧すれば何らかの情報が得られるかもしれない。とはいえ、細川は生涯幼稚園にかかわったわけでもなく、専門作詞家であったわけでもない。彼がこの歌を作ったのは、附属幼稚園を擁する女高師校長職にあつたからこそであると考えられる。野口の「細川校長作の幼稚園保姆合唱歌」という表現を素直に受け止めてよいのではないか。